

逝去された名誉会員への追悼文

大平昌彦名誉教授を偲んで



1914年 7月 1日生
 1939年 3月 九州帝国大学卒
 7月 海軍軍医として従軍
 1946年10月 九州大学医学部復帰
 1950年 5月 九州大学助教授
 1954年 9月 ピッツバーク大学公衆衛生学部入学
 1955年 6月 Master of Public Health の課程を終了

1957年 6月 岡山大学医学部教授
 1973年11月 労働大臣功績賞受賞
 1980年 3月 岡山大学名誉教授
 2010年 2月 1日 逝去

恩師大平昌彦名誉会員（岡山大学名誉教授）が、去る平成22年2月1日未明に老衰のため安らかに永眠されました。享年96歳でした。昨年8月に御令室様が御逝去され、愛妻家であり年老いても理想的で知的な相思相愛の御夫妻であっただけに周囲の者は一様に不安を感じていましたが、お別れの日を迎えることになり痛恨の極みです。

先生は略歴に示されていますように、わが国の医学教育界にあって最も先駆的に公衆衛生学界を切り拓かれた優れた教育者であり、わが国で最も多くの門下生を養成されました。地域や職域におけるプライマリ・ケアやヘルス・プロモーションを推進する家庭医や産業医、医科系大学はもとより保健・医療・福祉に関わる教育・研究分野、さらには国際的な舞台も含む国・都道府県・市町村の各レベルの行政機関に加えて政界にまで幅広い分野に多数の人材を輩出させた岡山大学医学部衛生学教室を23年間にわたって主宰されました。

これらの基礎になったのは、ロックフェラー財団のフェローとしてピッツバーク大学の公衆衛生大学院で Master of Public Health の学位を取得された留学生活だったと思われます。多くの海外留学者が知識と技術の取得だけに終始したのとは異なり、当時ようやく兆しを見せ始めた原子力産業における労働安全衛生システムや公衆衛生学の基礎理論としての「人間生態学 = Human-ecology」の概念、人間集団の健康問題に対する調査・研究の方法論としての疫学—Epidemiology を、わが国の医学界に紹介して公衆衛生学の学問的な基盤を築かれました。

研究活動としては、日本衛生学会や日本産業衛生学会等の総会の開催や日本公衆衛生学会では最も困難な時代に理事長を務め、日本学校保健学会の活性化にも重要な役割を果たす等学会活動への貢献は極めて大きく、特に各医学会の社会的責任と役割を果たすために大変な御努力を傾注されました。

研究業績としては研究室や実験台の上での理論

や思考だけに終わらせることなく、実験室内での放射線障害に対する化学的防御に関する動物実験に始まって、わが国初の原子力開発事業である動力炉核燃料開発事業財団・人形峠事業所の労働安全衛生の顧問として常駐の産業医を派遣し、日常診療の中での調査・研究活動に従事させました。

実践に根ざした医学教育として高知県の僻地医療センターや保健所へ教室員を医師と看護師・保健師とのチームで派遣し、夏季休暇中の医学生の「学外フィールド実習」に結び付けていました。日本医学会総会での特別講演「労働衛生の立場からみた放射線障害」（第16回—1963）は当時の我が国の産業界のみならず医療の分野における放射線業務従事者の被曝実態を初めて全国規模で明らかにした調査結果として大きな波紋を広げました。森永ヒ素ミルク中毒事件の被害者やスモン患者、地域開発に伴う新産業都市での公害問題等の疫学調査の成果は、いずれも司法での最終判断の科学的な根拠となり、その内容は国際的にも高い評価を得る水準でした。執筆は遅筆の典型でしたが、その原因は余りにも緻密な文献検索に時間をかけて推敲を重ねる真剣さによるためであり、その姿勢は崇高さを感じさせるものでした。日常の医学生への授業に際しても講義前の真剣な態度に圧倒されて挨拶の言葉を掛けるのも躊躇させられていました。講演は決して魅力的ではありませんでしたが、準備されていた原稿をそのまま印刷に回しても文章として完成しており完璧な内容でした。

わが国では最初に教室の行事として「公開の研究会」を毎週夕刻から開始し、教室員と学外の研究者や現場の人達との自由な交流が現場で発生している健康問題についての最も確実な情報収集源であり、問題解決の方策をめぐる激論の中から研究課題が設定されていました。医学生の地域や職場でのフィールド実習を始めたのもわが国では最初の試みでした。医学生を大学病院内だけでなく、日常の生活の場で「考えさせる」のが医学教育だと常々教室員に指導していました。

定年退職後も高知県衛生研究所や四国学院大学、順正短大などから人徳を慕われて依頼を受けると過大な責任でもお引き受けになって、周囲のものを心配させることが多くなりました。このような激務の連続に御令室様をも巻き込まれ最近では御幼少の頃からの馴染みが深い九州に引籠りがちになって居られました。門下生が訪れると学会や教室、門下生の思い出を懐かしく話されて居られましたが、最近はそのような機会が少なくなり御無沙汰続きの中での訃報に接し、反省させられています。

衷心より哀悼の意を表します。長い間本当に御苦勞様でした。

岡山大学名誉教授 青山 英康